コウモリに似た獣脚類恐竜アンボプテリクスの発見

1 億 6000 万年前（ジュラ紀後期）の中国遼寧省の地層から、コウモリのような膜状の翼をもつ小型肉食恐竜が発見され、アンボプテリクス・ロンギブラキウム（*Ambopteryx longibrachium*）という学名が与えられた。この化石を記載した中国科学院古脊椎動物学・古人類学研究所の M. Wang（王敏）らは、研究成果を英国の科学雑誌「ネイチャー」の 5 月 9 日号に論文を発表した[1]。

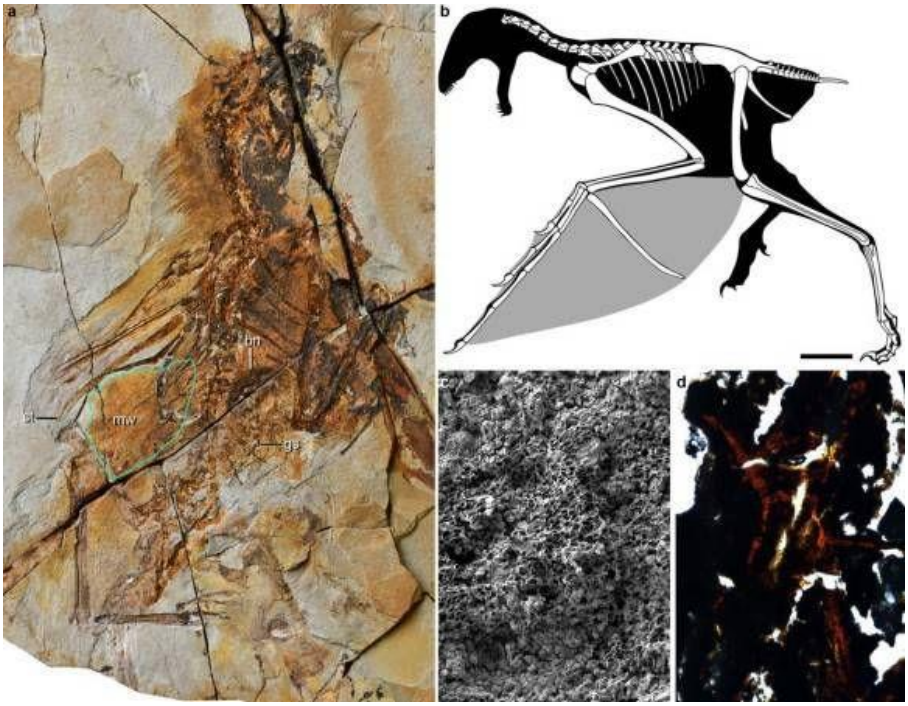

図 1．記載された化石[1]。

記載された恐竜の全長は 32 センチ、推定体重は 306 グラムで、全身の骨格がほぼ完全な形で残っており、前肢から長く伸びた指の間に膜質の翼も確認された。モモンガやムササビのように樹上から滑空飛行していたとされる。膜質の翼をもつ獣脚類恐竜としては同じく中国で発見されたイー・チー（*Yi qi*）が知られており、今回のアンボプテリクスは 2 例目である。

膜質の翼をもつ生物としては同時代に生息した翼竜類が知られている。また、ジュラ紀後期には、獣脚類恐竜と鳥類の中間的な形質をもつ始祖鳥も見つかっている。古生物学者たちは、鳥類の祖先を獣脚類恐竜に求めているが、獣脚類恐竜がどのように飛翔するようになったのかは依然として謎に包まれている。こうしたなかで、羽毛をもった獣脚類恐竜以外にも膜質の翼をもって滑空飛行できる獣脚類恐竜が出現したことは興味深い発見である。

今回の発見は、鳥類の起源、さらに飛翔の起源に関する論争に一石を投じるものである。

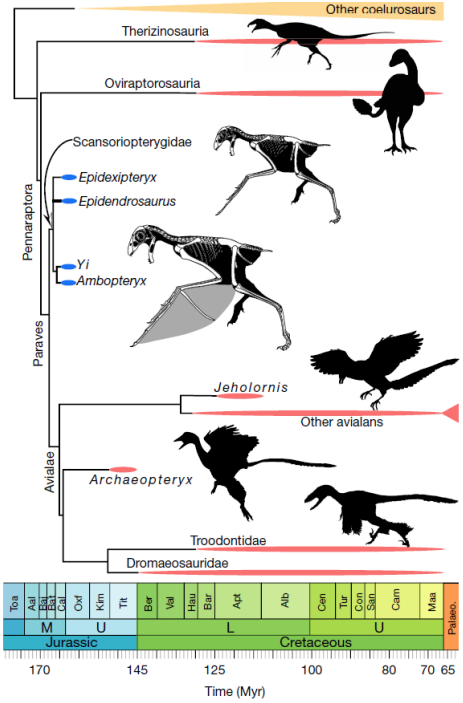

図２．獣脚類恐竜の系統樹におけるアンボプテリクスとイーの位置づけ。

[1] Wang, M., et al. (2019) A new Jurrasic scansorioperygid and the loss of membranous wings in theropod dinosaurus. Nature, 569, 256-259.